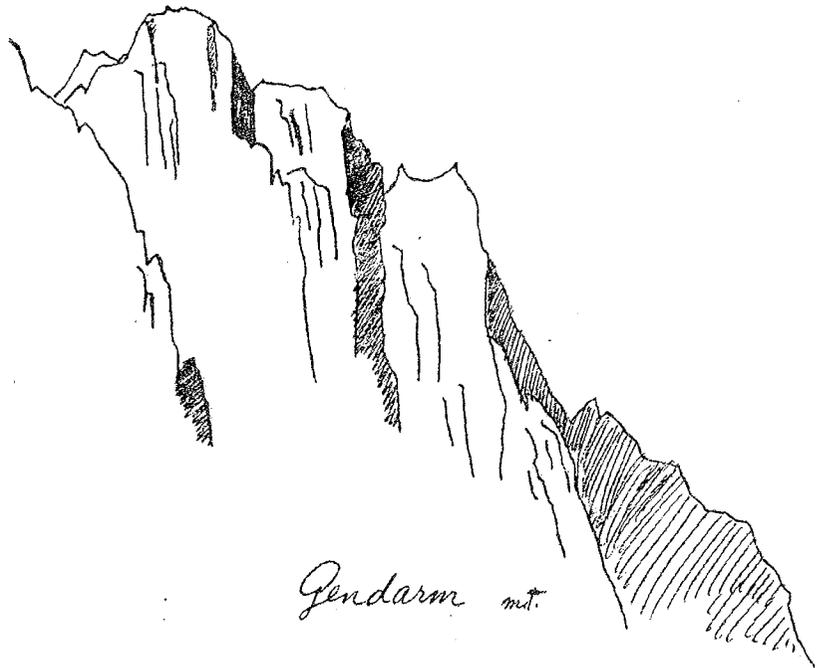


徃 徃

第十号

— 昭和28年4月 —



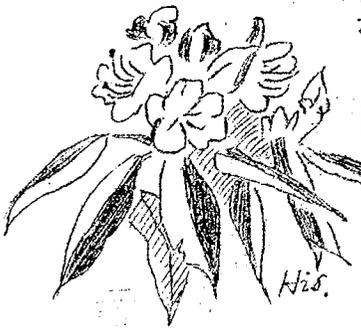
都立西高等学校体育会山岳部

巻頭言

CL 林 武 志

六三制の欠陥により、高校生活はほとんど無意味に過ぎ去る。小岳部は於いては最も着しい。登山の「I」の字も知らぬ中學生が、高校小岳部に入り、一年又は二年半も至りと中絶部員になつてしまふ。「登山」と始めて一二年位は非常に盛つた様な気がするものだ。その上、新教育の自由のほき遣えから、先輩の言うことを聞かず、邪道に走る。そして遂には死に至らしめる者がある。

登山は、一年二年で一人前に出来るものではない。相手は自然のだから、遠く人間力及びぶところではない。自然は知恵しい、時には非常に親切だが、一旦暴れ出したら最後、全く人間の手などには負えぬ。登山はその未知なる自然と相手とする。だから「もう完全なる登山家になつた。」などと油断しては行けぬ。常に新しい予が出来るのだから、それを切り抜けるだけの勇氣と判断力と体力が必要だ。これらは、自分自身の経験をもとにしたべきである。研究によつて得らぬものである。しかし、経験には限度がある。その限度を越すために、他人の経験を聞き、それを自分の経験と同様に研究して身につけるのである。その後、自分を以て當るものが先輩である。又先輩はそれを為す義務がある。後者は、先輩の手を借りて行くのを待つては行かぬ。積極的に暖かい受け付けぬ。先輩の後輩をどう受け取るかは、その人が持つて居るものではない。その人が正しく、安全に成長することを願うばかりに取る行動である。その別をあげる。西高小岳部に於いて、個人小行に於いてアクシデントを起したことがあった。當時のC.L.は非常に責任を感じ、後輩にこの二の世料をさせまいとして、熱心に要請を起したことがあった。一方、後輩の一部には彼の積極的な熱意に對し「差手がましい」とか「我々を束縛しては行かぬ」とか言つて彼を拒絶したことがあつた。あまり我々が過ぎた旅だ。兎角人間は見栄を張りたいものだから早くそれを捨て、謙虚な氣持で事に當るべきだ。一口に謙虚なる氣持といふが、これが又非常な難題である。一朝一夕に出来るものではない。常に山頂に立つた時の様な氣持で広い心を持つて置きたらいい。

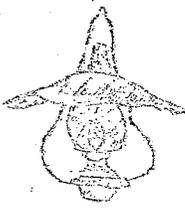


西高山岳部のあり方について CL 林 武志

創立以来すでに七年余の月日か経つた。最初の遠足の様なものから出発し遂に現在の様な立派な部を形成したのである。う先づオ一に諸先輩の努力に感謝しなければならぬ。それ輩は社会の悪条件をのりこえて非常に苦勞されたのだ。その結果現在の部員は非常に円滑に行動出来る様になつたのである。まず現在の部の組織についてのべると部員は正部員、準部員、新人の三階級に分けられ部の運営を円滑ならしめるために審議機関として正部員会をおよび部の最高責任者並びに最高決議機関としてCL一名、部長、副部長、書記、庶務、司庫、その他顧問教官若千名顧問若千名を顧問機関としておいてゐる。この組織は発展の基として行われたいので部の行動を計画的に円滑に行うために自然の要求として生れて来たものである。すなわち山を理解し一般社会で行われる一廿したハイキング程度のリーダーが安全にやりのけ得る知識、技術を習得することを目的としてゐる。ゆえに尾根も沢も岩も雪も氷も少しづつ広く経験することを知んてゐる。決して一部の者だけの山岳部ではない。名山行とも出来るだけ多くの人が参加出来る様にいろいろと苦心されてゐるのである。二十七年度の公式山行を見ると平均十名以上参加してゐる。これは以前にはあまり見られなかつたことである。以前は個人山行が主とされてゐた。現在の山行計画は最終目的の三月の山行を定めこれに基いて一年間の山行を考へる。とを求にしたがつて全部員が一致団結して活動するのである。西高山岳部は大学山岳部や一般山岳部へ入る人も入らない人も充つて居る様に広くとつかりと基礎技術を修得するために努力してゐる。決して岩ばかりとか高山ばかり

とか片寄つてはならない。昔のことかつたこと地圖を讀むこと適切に判断を下すこと等々その他登山の基をなすものを修得することを目的としてゐるのである。前の部員制のこともどうもかこの制度が最良のものとは思われないが部の発展段階として当然行われべきものである。以前の如何なるものでも總會に於て討議し決定する手法はいかゆる民主的で理想的ではあるが現実の問題として部員各人のとべルに差がある。特にレベの低い人が多ければ場合多数決による象鼻短におち入りやすいのである。故に現在行われている部員制が行われたいのである。部が部員の向上及び事故防止その他部を健全な行動をするために。

結局西高山岳部は個人のものではない。精緻主義であつてはならない。岩とか沢とかに片寄つてはいけない。あらゆる條件がゆるす限り広く経験すること又出来るだけ多くの人が出来るだけ多くの経験を積むことにすること。二重は今年後天部員全員が絶対に忘れずにはならない。



しかし暗くなつてから登山者は続いて来る。小屋が満員で
断わられた人がテントに泊めてくれと来る始末。こちらでは
とねてしまふ。夜中に雨が降り出した。明日のことが気がおほ
れる。

田中将利行動

平地よりからポツポツと降り出し大雨も大に着く頃には次
才にはおしくなりついに水川山荘へと後もどりする。

五月四日

A隊行動

予定通り三時半頃全員起床したが昨日の心配通り雨である。
リィガー、O.B.等協議の上未知のコースであること。雨のため
稲田の足がつること、別人の男のこと等の理由で雨の止むのを
待つことに決定。(止まらなかつた場合、七つ石一六つ石一巳
の戸大くびれ一日原(油)―塩地谷のコースを取る) 小降り
にやつて来たので予定のコースを取る。芋の木ドックに登り口
あたりから、指導標もなく道はつきりしない。芋の木ドック
を下りて道が明瞭になりピツピツが上る。梯子坂の小屋跡で
道を食いつらうと先より先がコースについて討議する。ふし福田
はカツシニと時同(朝の出発が遅れたため)と別人の男と等と
等々塩原(下)のコースを提案したが、結局計画通りに行く。
カツシニのため悪戦苦闘二時間半。ようやくそれから解放され
る。その後も多少悩まされた。O.B.田中(三)の手紙を見つて塩地
谷の同窓と、みだ懸力を感ずるが、時計の針は五時四十分を
指しなれども、進んで行く。ついに塩地谷を断念し一杯水
小屋へ急いだ。急いだ、めが小屋の一の下り道を見逃してしま
かすと雨のためやむを得ず路工にテントを張る。乾パンをかじ
って塩地谷の旁をぬがう様。

田中将利行動

単独で大表谷に入ろうと家を出て来たのであるが相変らず

降りつづく雨のため断念せざるを得ない。長谷川陵の連中を
にかけるが塩地谷小屋へと雨の中を急ぎ進む。小屋で飯をつ
めこんだ後、長谷川陵へと向う。一杯水は三十人ほどがハイカ
―でにややかである。この中にO.B.野野を見つけた。ハンギ
ョーの頭をなくして小川谷からの三人(西谷)と合ひ西谷の消
息を聞くが二時を過ぎたこと。ハナドリ西側に腰を下し
てどなたか風強くため割谷からの二人に聞かす。みよが一瞬
でこの二つ割谷を過ぎるべきであること。連絡紙で塩地
塩地谷小屋にもどる。再び強雨となる。

五月五日

A隊行動

雨は小降りだがかす相変らずである。長く悪い道を空を腹
を引く返レ一杯水小屋に入り飯や水をかき込む。昨夜の雨の
中を縁にかけたためか、胃の予備通過するにむか、わらわ
星の予備不調である。しかしソバツツ山から急降して塩地
谷へ急ぐ。小屋からやつホーを聞いた時は何とも衣を穿たれ
どか。それからは皆足と膝を擦りながら歩いた。小屋で川谷谷班
の人達と、それには美味しい昼食を食べて一息つく。三時半
に雨降一掃になつて川谷へ出発。丸山の鞍部までの序には
いささか急がした。川谷山頂で一休みして塩地谷へ下る。自渡道
また半分の足で快調に下つた。(但し二の時胃の予備不調は
けれども塩地谷に着いた時は雨は降り止み、まじりた。

田中将利行動

以て晩中火をたいたが西谷の連中は遂に未だ。息を定音と聞
いて目を見ます。かす深くこれではやつこい道は線がまよつ
たろうと、よく出発。塩地谷の頭でヤツホーを迷走も返るがし
松元或は一杯水と断絶す。日向沢の頭をすわつて小屋に帰
着。一杯水より向うで塩地谷を送定したとすれば割谷と割谷の源
頭しかなく、再び日向沢の頭に立つ。かすは上り晴れてはくさ

またまた片方はあく水戸は後続をまつ。全員集結後水筒を満して
 出発。ゴロ口のなかをりぐミカルに進むとやがて正面に大きなが
 礫が現われ我々は右に急折するゆるいクローアルへつづつ二む。
 一たん体流となつた流れも木に囲まれ草にみみれがびくのオアシ
 スの如くに現われる。ついにガレ場となる。このガレは他の溪に
 較べ短いものではあるが初心者はわががり重直に立たず体を山側
 に傾けるため落ちるはなはだしくとかくオールドを乱しかちとなる。
 下り他のパーティが尾なりと断言することもあるが落ちに神懸算
 となる。きん張の一しゆんも過ぎ尾根へととび出し増々谷へと傾
 う。道佛小屋は登山者で満員。三角点に標をふるしてミルタコー
 ヒシ。石川かちよこーと茶ゆんを傍りに行く。水場往復の後
 一路鳥尾山へ。伊藤石川はかなりバテテいる。トツプとラスト
 は離れがちとなりオールドは乱れる。鳥尾山でオニの倉倉後三の
 跡とエールを交してつ鳥尾尾根を下る。ま遠くの山々はザエールを
 かびつてゐる。この下りでオールドは完全にバテバテ。トツプ前
 谷以降着藤高橋 佐藤はしばしば併つにもかかわず加藤石川
 伊藤及び笹田 田中(田中) 森沢 平沢の二團に連絡を断たれ
 る。道はついでにオニアザミにチクチクやら水ワフンで下る
 にはやせがまんが必要。ここに於て喉の乾きを一致は表面に現は
 れオールドが乳水のまま林道まで下る。大倉の壘堤でアブザイレ
 ンの練習後夕やみせまる黍野盆地を遊歩へ。

反省

加藤 佐藤

前にあげた目的のために三パーティとして各パーティ間の運送を
 りーダーシツプ、メンバーシツプの強化をはかつた。新人の募集は
 陵を得た知織線路を大きなものにしてよと新人の参加を期待して
 いただけに一年の参加の絶無は非常にさかしく感じをおぼえた。か
 りーダーシツプの点では大いに成功したと思つてゐる。
 ミパーティに分けた構成であつたが当日多数の不参加者のために

分辯してしまふその場を考えたパーティまの構成のための更練の行
 動に當つて幾多の欠陥があつた。これは見のがせない。行動中
 オニ多という大パーティをいかに行動し統制しれんらくするか
 という点でラれりがあつたが統制面の強化を除いて他は成功し
 たようだが鳥尾尾根を下ることに對し若干のあるべいとを
 強制したが上にあげた目的の他に体力養成などの面から受当で
 あつたと思ふ。幸い天気に恵まれ水事故のなかつたことを感謝し
 てゐる。

50回 トナリ 力尾根 偵察

目的

本目的は二年の山行の総決算とも言ふべき三月のトナリ
 尾根アタリのための偵察であつたが過去の台宿には経路的
 に参加出来ないのであるがたのため出發の數日前に台宿
 を告めた。

ルート

- 川村(2) 松崎(3) 笹田(2) 田中(奥田) 田中(梅利郎)
- 川村(2) 松崎(3) 笹田(2) 田中(奥田) 田中(梅利郎)

裝備

- ザイル三十米(一本) 大サベ(三) コツプエール(一) テント(一)
- サタ(二) ノコギリ(一) キヤンパスバケツ(三) 双眼鏡(一)
- 三ツ道具(その他)

七日

七日(六) 一 穂積(佐藤) (三) 二 日原(佐藤) (五) (三)

七日

七日(六) 史(五) 史(五) 又(六) 又(六) 一 縦走路(〇) (三) 一 木賊
 (一) (三) (一) (二) (三) 一 引き返し地兵(三) (二) 一 木賊山(六)

七月十七日

八三〇) — 兩門滝(五八五五) — 五(二〇三三) — 田ノナメ
(二〇四八) — 東ノナメ(二五二二) — トサカ谷(四三三〇) — 日魚
氏宅

七月十八日

日H(六二五) — トサカ谷(七一五) — トサカ尾根(八二七八) —
小岩場(八五〇) — 大岩場(九二〇) — トサカ尾根(八二〇三七)
トサカ谷(二〇四三) — 日H(二〇四〇)

七月十九日

日H(九二〇) — 新田道分岐(九四〇) — ナメラ沢合(二〇三三) —
新田分岐(二〇三三) — 雁坂峠(二〇三七) — 雁坂小屋(一三三七)
(三三八) — 鎌走路(二〇三〇) — 雁峠(三〇四) — 笠取小屋
(三三〇)

七月廿日

小笠原(五三〇) — 新田道(七三五) — 七(四三) — 大カ氷(九三三) — 九
(二五) — 亮(九三〇) — 一(三三五) — 狼平(二〇三三) — 雲取小屋
(二四二) — 二(三三) — アナ坂(二四〇) — 堂所(三三三) — 鴨沢(二二二)
— 川野(四三八) — 五(二五) — 米川(六二〇)

概評

西高川山岳部が今まで新田と来たには興味
父であった。その女性部は山岳の中は黒い森林
に、つま水で野性的な強り線をもつて、スカイ
ラインを撮る谷塔群が鶏冠山であり、この山は石楠
花山岳部が古くかつ手とつけけるが、未だ完成して
さえず。山岳部は於いては、この研究が幾多の先輩の宿
願でもあった。本山行の目的は「鶏冠尾根が積雪期に幾
々の対称と有り得るか」の研究であり、同時に正部員及び
OBの上級合宿を行い、転換期の基礎の充実にあった。

しからず、上級部員の合宿であったのか、リーダー会の不手
際と期末考査のために、連絡不十分で夏山合宿(新人を
合め)を二つも作ってしまったことになってしまひ、
改正する暇もなく取って新人合宿も合めるといふ結果に
陥り、我義目標の成果は半減された。水でしめた。
尚、このトサカ山合宿にわたっては、今までの研究を改めて
集めて後日を期すつもりである。

行動記録

七月十五(雨) 試験の終了した翌朝に
送り出される。曇つていた空が向岳寺の山内のことろか
う遊に泣き出し、重荷に早くも下りか出る。上釜口で軌道
に歩たが、度に進まざり、休みの回数が多くなる。おかげで所は
玄壇の手前、西東沢の軌道の分岐点で止つて居たが、日暮が
早く日原氏の足元に入つた時は、大分暗かった。
(註)二俣にもどる表す予定を変更。

第一日 日原員百荷量(数字は母員)

氏名	経路	荷量	氏名	経路	荷量
川村	(正) 六五	四七	松崎	(新) 六〇	七八
下出	(正) 六五	五九	小田	(新) 三〇	六七
川村	(〃) 五五	七〇	米野	(〃) 三〇	五九
佐藤	(〃) 六四	六四	田中	(〃) 七〇	三四
			田	(〃) 七〇	二七

とヒスケッドでコンパを行い労をねぎらった。時間が無いので早々に山頂を降り、鴨沢へ向けて出た。糊板で一才休んだだけ、ガクが肩に喰い込んでくるしヒザはガク／＼してくる。鴨沢迄下りてやるとほとしたかバスへ乗るために青梅街道を川野迄行かなければならなかった。川野で二十分待たせバスに乗り水川へ。水川の駅前がギョウ場へ遊びに来た途中であろうか。

〔東沢合宿について〕

OB 笹田 英次

東沢合宿についてとつて、これとゆう事をいえる義理の無い私ですから固苦しく考えずと軽く談話をなして頂きたいと思っております。先ず小屋についてであつたがB川の日釣から考えて強いてテントも張らずに無人小屋に寝袋をかかずに日原代宅を使用したのも義理もあり天候状態などから考えて当を得ていると思つた。天だあまりにも小屋の條件の上で長考さえたのだけ。次に現地に於て計画を数回変更しましたが、これなどは天候状態と山の状態の悪さから考えれば当然であつたと思つます。けれどもその前にこちらで計画を立てる際に種々の條件を考えて数種の計画を立てるその場合に於いて過当なものを選択の如いと思つます。

次に全員の態度ですが、上級部員は概して勤まらずが口の方が少し多いと思つます。卒業とゆう言葉を行つて頂きたい。他の部員も人といわれる前にやるように申しあげたい。まめに勤めていければ人は何もい物ないでしよう。今迄はともかく今後は多めに勤まらまわらましよう。次に現役諸君は今後とも多めに歩くことを練習して欲しい。歩くのこま山登りの基本ですが、少敷の部員は歩くのまやがでている人がいます。さて最後にトカカ山のアタックはもう一度やってみる価値があると思つます。天候と装備に留意を置いてもう一度アタックして頂きたい。

東沢合宿は善断山へ行かぬ私にとつて非常によろしかつたと思

います。現役諸君も大いに頑張りましたから今後の精進に期待がかけられます。人の苦言など気にしない事を祈願いたします。

公式山行計画

期日 五月十日(日)

コース A班 水川→川苔谷林道→百二郎口→

川苔山

B班 白丸→本仁田山→大タワ→川苔山

C班 川井→赤積尾根→川苔山

D班 川井→大丹波川→御手口小屋→川苔山

註 口班は新入部員多数参加の場合の并行。

係 田所 田口

期日 六月中旬

コース 三沢→勤七沢→塔飯→大倉尾根→三沢

係 宮上 稲葉末

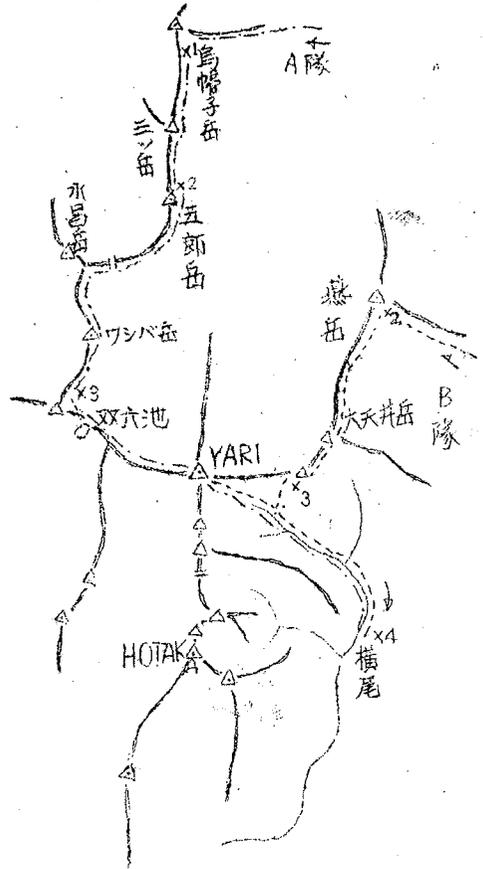
日が高いのにテントを張ったと云うのはこの調子で進むと徳本峠(水たまり)あたりで暗くなりテントを張るのに困難であることと、なれない重荷で相違疲れしているのだから以上疲れると縦走の時まいつてしまうからである。

八月二日

昨日の疲れにカッスリねてしまひ目がよめたのは日が高くなるからである。沢沿いの道をしばらく進むとやがて徳本峠への急登となる。思いの外案に徳本峠に「つこ」が出来た。見える見える西ホジヤンガルム明神岳前ホかあの下あたりが淵沢だ。この雄大な光景に狂喜する。田舎を満した後かけ下る。平凡な道ではあるが木高の山々の眺めに疲れも忘れ心はけあむ。やがて山々は視界から去り広い河原に二百ほど流れる梓川が我々をまねく。明神池に近い明神かんに着いたのは三呼頃。ホッカ品以外を「」に取付け横尾へと急ぐ。重さも半分(四貫)となりハイカーに比べて追はなし徳沢園に比べ込みやんを感ずるようになる。我々の行動予定(徳沢―横尾―上高地)をまいてみたりしているハイカーをしり目にむき進み。横尾出荘にホツカして引き返すころは二の森、谷間に夕やみかせまっていた。徳沢のキヤニフ場はテントで一一杯しかもうまうな息しかたに下っていた。明神かんで探をとり上高地のキヤニフ場小梨平へと急ぐ。テントを張ったのは九時過ぎだった。いたるところでギヤニフアイアアが営まれている。皆うかれているにややかた。我々は火もたかずに寝込む。

八月三日

明神池で遊んだ後上高地よりバスに乗る。松本より浅間山の電車にのり都筑先生の家で林、田中(マ)平沢と合流し一泊。



先登	定着	B	先登	八月	予定 さ 水 で いた 合 宿 指 揮 系 統
山崎				1日	
				2日	
				3日	
		C.L	CL	4日	
		加藤	山崎	5日	
C		SL	福田	6日	
川村		岩堀	C	7日	
			中	8日	
川村				9日	
源崎	C.L	安藤		10日	
	S.L	山田		11日	
		田中		12日	
C.L	加藤	安藤	山崎		
徳本	洞澤	巖班	高帽子班	備考	

尾根下、往來する者つづめを見とれ、いたる雨加やうである。
 東天更感で強風をこけてツマツケをかくる。日向は葛瀬川
 に乾く約一ノ米の強風である。途中登山者に会う。赤岳ほど
 かつくころは金買ぬれぬづみ。岩は赤ちやけい。南側は奇
 怪な岩がニコニコと出てはスーッと消える。平次さん、今日も
 調子が悪く空腹を訴えるので赤岳小屋跡でカンパンを二にぎり
 とリンゴを食う。冷えたせいかわ先生が足に神経痛を起し、リンゴ
 をいじめている。ワリモの乗越でいく分好転した天候も思節剛
 の顔むかしの風雨となり、口三折岳の三角稜をいつの間にか登る
 事。アレートをしやむむにむすむ。トツラとラストはぼけれが
 ちにびる。福田先生が気になり三ツ俣運華の小屋湖りと
 決める。ふかふかとハイマツにくるまつた小屋にドカネツミ
 もニヤイヤ態でころがりこむ。この小屋熱しく感じが悪い。女
 主人はえぼりちやうついに三百五十坪の栗湖料理をとられる。
 外にテントと張子と云う者があつたが明日を考えてかまさん
 する。子孫の代まで泊まりたいがよい。

八月七日

タイム 小屋(五・五八) — 水場(六・五九) — 七(七・八) — 双六池
 (七・五二) — 九(九・三三) — 赤岳の半米(一〇・五〇) — カンパン(一
 一・四一) — 二(二・〇〇) — 湯俣(下)降口(三・三四) — 一〇分して
 二分休 — 槍の肩の小や(四・八一) — 一五(五・三三) — 山頂(二・〇五
 — 二・〇三) — 小屋(二・二五) — 二四五 — 殺生小屋(三・三
 — 三・三五) — 小屋跡(三・四八) — 水場(四・〇三)
 四・〇五) — 休(四・三一) — 四・四〇) — 合流(五・一〇)
 — 槍沢ヒユツテ(五・三三) — 休(六・二四) — 六・三〇)
 — 二の股(六・三三) — 一の股小や(六・四二) — 六・四五) —
 横尾山荘(七・四五)

ハコとほあひま。エチカに豪傑のし、山加津代も朝氣に
 り頼むから西岳小屋をかんぽつてくれと云つた調子。僕は西
 岳小屋に着いたのが五時。往復四時間のアルバートに心身とも
 に疲れて西岳小屋跡。小屋の人々は非常に親切で我々ヤル
 口二人をよく理解してくれて半額以下の一五〇円で晩飯と朝
 飯を食わしてくれ、フロン、道も沢山滑してくれ。こころあやじ
 け、伊々仲快が杖で西岳から槍沢を下り、地獄ももしわくち
 やが多いから滑かつたらうし、万集合、屋根の下で熟睡。

よく食味よく食つて
 よく干ジを打て

日 晴れ 曇

起床四時半。六時半小屋の人々に所礼を云い、昨日の疲れをこぼし
 意気さかん天気も下し。近づくにつれ薄々霞をもよお槍、それ
 に釘をまかり探温厚な草念。綾足四目目にして初めて悪けれ
 だ快晴。岩のぼり、要凌、お花畑、全てが高山気分を
 満喫させてくれる。お前にも後にもソロソロ歩いて、ハイカー
 のスカート背広にホストンバツグというスタイルに、莊嚴
 可気分もさうこわされき。肩に荷物をおいて登頂開始。頂二十
 時着。ミルクを沸かしてA隊を待つ。十二時まで西岳小屋から
 現れるのを待つたが、ついに現れず横尾にて待つこととして先に
 下る。槍沢を下る途中、C隊が滑代スリッパで滑り、手に

八月九日 快晴

タイム BC(八二四)ー奥穂高小屋(九三三)ー奥穂高頂上(一〇一七一・一〇三三)ージャンガルム(一一一五)ー二・四三ー奥穂高頂上(一一三三)ー奥穂高小屋(一一三三)ー二・三三ーBC(三三〇)

朝めしをパクツいてゐると渡辺氏が現れえらく急がれ朝めしを半分登めしにまわしやすき腰をかかえて奥木に向う。オイテンでオハラシラ眺望をほしおまへにしてむっかいスリッパをやりやう百雪嶺をトラバースして奥木が小屋に到着。や、急な路を一気に奥木に向う。頂上には二米四寸石が積み重ねてある。これ北岳より高くなるわけだと思ひながら奥木周辺の眺めを觀賞してジャンヘリアレイトにヒリつくが皆バランスが悪くピツクかがたくーであった。ジャンにて上高地方面が実にすばらしい。見た。帰りには奥木にて登めし、こゝで渡辺氏と別れる。かたかたの下りをBCに向う途中がリセードを見る。

八月十日 晴

タイム 赤平がリセード(八〇〇)ー二・三〇(後半がリセード)一・〇〇ー四・三〇

かりせード練習は白峰山岳会が伊藤さんに依頼する。ピツケルぬ敷の關係で練習を予赤組「加藤、平次、福田、田口、川村」と予後組「田中、林、岡谷、川口、高橋」にわけし行く。予赤組は五・六のゴール、予後組はサイディング左。この予後組のHがかりせードが停止の時にピツケルをばす、ゆしう我部まき、てり重量。伊藤さん下の方でかんづいてゐるかうまくとめたら大したもろ。下手をすればシエルンドはつ、こんで市の人オロ

ク。だが伊藤代員事に巨体をよめる。かくして全員乗車にBCに集合。

八月十一日 晴

タイム BC(六三三)ー北水(一一三〇)ー二・四〇ーBC(一一三〇)ー三・三〇ー岩小屋(五二二)ー横尾(五・三三)ー五・四〇ー徳沢園(七・〇三)

体力的に距離の出来た者「平次、高橋、川口」をキヤニア件派にーにして他は北水沢のバルジューを突破して東横へクハイマツをこりて横尾にある。テロイー途中にて岩登りや真似事を碓井さんにク。テロウする。北水にて碓井、伊藤氏と合れ南横尾を下つてBCに到着。荷物とまめりのニリク米を前々堂にうりつ、横尾に向う。横尾でや、休憩して徳沢で足をのぼす。こゝで集合。

八月十二日 晴

タイム 徳沢(七・五五)ー白沢(八・三七)ー徳本峠(一〇・四三)ー一・三三ー岩奥留(一三・五九)ー一・五三ー三股(三・三〇)ー岩留前(五・三〇)ー良々宿(六・〇三)ー良々取(六・三五)

川口は体の調子が悪いため上高地からバスで下るために白沢の集合で合れる。各々荷物縦走中よりふえる。この日からピツケルと予後組はなる。ピツケルは割合に早くホツカ隊の下りのタイムと変化はあった。頂上までのアルバイトはものすごい。頂上でオ一の登後、こゝで豊多摩や沢木と合う。緊急撮影をして急な下りを下りはじめ、岩留にてミルキをわかす。つまりな道は、こゝで集合にてオ一の登後、こゝにて各自四合つて登

食に平ら下のことになり途中にてホックと雨が降つて来る。
長々宿から長々駅に向う途中が工高地からイバスに追いぬかれ
るこじしほして雨の中によろやく長々駅にヒビ込む。

第一期 (四月八月)

公式山行総評

OB 田中將利

昭和廿一年敗戦の渦こんどんとして居る中に早くも体育部として
立ち上つて以来六ヶ年幾多の社会的困難と斗ひ、部の前途の先頭に常
に立つて来た最後の旧十中部長が大膽な果敢、いよいよ本格的に新
制中卒者のみの部となり、部自体の目的並びに制度の大転換に迫ら
れ、此所に部の充實への一歩として新体制西高山岳部の歩みが始ま
り出したのである。

部の方針を今此所迄のべるだけのスペースがないが当面の目標と
て必要なのは、今年度(一九五三年度)より一つ一つの山行をより
効果あらしめ以つて山行を履いて基本技術の完全な充実にあつて
とにしたと云うことである。これにより部分によつては、地味では
あるが、前年度より更にシゴキがかけられたことは言うまでもなく
そのためにオニ歩的岩登り技術等は、殆んどと云つてよい程度実
を基本技術へ転嫁せしめた。地味なだけにつらくなつたことは勿論
であり、部員にして、この期間を歩むことが出来ない者があ
つたとするならば、むしろその人自身を止めた方が幸ひなかつたか
らうか。しかし無理があるとも云うならば、正部員の体を鍛えて下
さい。と云ひたいのである。私自身の体でも良い。この決定要素は
大雪山岳部ならいざ知らず、部体の大山と云うことよりもむしろ自
然への強い愛着によつて居ると云うことであり、今更私が説明するま
でもないことである。今私の云はんとして居ることは、東西もわか

らぬ中卒者の新人を如何にしてシゴキま之に出さすにさせるか
と云うことである。換言すれば、如何にうまく新人歓迎会を成功
させるかと云うことなのである。これは一つの山行を新人歓迎会
と云う目的のために目的として行はねばならない。本年度の唯一
にして最大の失敗は此所にある。全部員冷静に考へてもらいたい
のである。オニ七回、何とオニ一義としたが、そしてそれと先づ出
来なかつた欠陥は一体何が。オニ八回との連絡はどうなつており
他の部員が糖刃的であつたかどうか。たしかに高山に於いて優秀
部員の育成に或る程度の成功を見たが、一年部員は完全なる全滅
ではなかつたが、人は常に集り散りしても西高山岳部を救つては
何にもなるまい。次年度にひか之けり、オニ一会の多者集一の能力を
めておきたい。

次に断つたことであるが前回の方針を充分生かしたと云ふ非常
に良い成果をあげたが、殆んど一部の班に限られ、或る班は全く
と云つて良い程の不進歩であつた。これも又パーテ、履行の研
究と共に我々指導員により資料を呈示して貰つた。ゴキキ一撰
出の方法を再検討する要があるう。報告にOB間で履行の意見の
相異があつた様に説かれであるが、パーテイ自体を長く考へて居
れば、自ら行すべき道は一つしかないものであり、又小生のOB不
統一の責任でもあり反省して居る次才である。尚一年生の不進歩

に關しては、リール会の準備を改めねばならぬであろう。

夏山の二つの合宿に出て見てついでに夏山であるが、笹原川合宿の方は、部員各自の自発的態度にまかせ、後者の北ア合宿では事前に撤回の準備をとり、合宿の意義並びにメソバードシヤア、生活技術、その他細目にわたる講義を行ひ、部員になつてくさせ、合宿時には、OB側が積極的に行動を遂行させてみて、結果は想像とは逆に、短期間(三ヶ月)での基礎充突には理想的な後者に劣りて良い成果をあげ得た。勿論、いろいろの不平等を云うものも出た筈であるが、云うものに決つて準備会に満足な出席がないと云ふことを短つて載せたい。又一年生には体力的にコクであつたので、お互度より一歩進んだものをもととして自発的に行動する、二七二と最良の方なのである。そう云う意味を新人中田口が當てるべきであらう。又一方前者の場合は、自発的に動き、儀式的精神を發揮するのは、殆ど決つて正副員か或は先輩と約束されたものだけであつた。このことは何れも準備会でも一回の山行で、とつてもない実行の差異を生せしめてしまつたのである。それを良いと云はれるかも知れないが、我々のB側としては、伸長に幾分の差こそある、全部員の常に進歩して行くのを限りなく激しめるのであつて、誰一人でも進歩の停滞しているものかあつても不愉快なのである。早く一人前の登山者(ケライマ)である前に登山者でなくして何ならぬ)になつて我々の仲間に入つてもらひたいからなのである。

夏山目的成果の一つ一つを検討してみれば、オ一に夏山自体さうリエンジョイするとは、前者に於いて目的めと制、後者に於いて五割弱と云つて良からう。後者は私がシゴキ過ぎたと云ふこともあろうが、前者の如く雨でも一つの山の断面なのであるから楽しめるだけの心ゆとりを早く持つてもらひたいこと、である。団体生活の理解と融化並びに合宿による働きの纏結は、先述の如く個人によ

明

により大きな差をひらいたのみで終つた様子がしてならない。結局、団体生活の不理解者は落伍せざるを得ないのである。オ二の山容の認識、生活技術にしても同じことか云えると思ふ。

夏山は、その年度の新しい共同の力を作り出す根元であり、新人歓迎会に次いで勢力を入れるべき山行であり、それと同様に二つの同僚な合宿を作り共同の力の作成が半成されたと云ふことは、私観と云はれようが、大きな失敗であつたと云ひたいのである。もう一つシユクことであるが、タリセードを例にとつて見ても、アグシテントと云う穴籠はあつたが、在前と午前の組の者との間に、はつきりとした實力の相異が生じたことによつてもわかち、タリセードが各々が自己の目的に対する限られた知識と云ふことは、決して忘れなくてはならないのである。オ一、オ二にシユクの程度があり、我々としても、オ一をばつきりと云ひあつては不可能である。要は部員各自の自主的活動にあるのである。オ一もオ二も、未と方さふり返つては、自分が本當に自発に對して愛と着を感じているかどうかたしかめ、悔に新人としての気持ちをいすれず、嫌な気持ちを自己のフロンテアラインを押し進め、克ち取つてもらひたい。夏山の二つの合宿を見て、激しく、その積極には居られない。だが、輝く水雪の出でんにNACの旗幟さうちふる後輩にバイルを叫ぶ日も近からうと思ふのである。

〔完〕

一九五二年山行総覧 (一)

1. 菅平スキト行
 - (1) 駒形他二名
四月一〜四日
 - (2) 御岳山
(1) 福田他二名
(2) 四月七日
3. 陸馬山
 - (1) 福田、香藤、小田、米野他
 - (2) 四月八日
4. 高水山
 - (1) 加藤他
四月廿八日
5. つづら岩RC
 - (1) 福田、岡谷
四月廿八日
6. 川谷山 新人歓迎行(分四七回)
但し長次有陵(分五)

 - (1) 加藤、林、福田、下出、香藤、戸田
川村、川口、小田、水野、伊藤、金沢
田口、岡谷、田中哲(他)、田中実(他)
(2) 五月三〜五日

7. 塩地谷小屋生活
 - (1) 福田、香藤、飯塚、坂井
(2) 五月六、十日
8. 大岳山(分四八回)
 - (1) 川村、石川、浜田、川野
(2) 五月十日
9. 大岳山
 - (1) 坂井A
(2) 五月十日
10. 葛葉川本沢表尾根
 - (1) 岡谷、福田
(2) 六月一日
11. 勘七沢表尾根(分四九回)
 - (1) 加藤、岡谷、香藤、佐藤、高橋
伊藤、石川、田中哲(他)、田中実(他)
車沢(他)、森沢(他)、徳田(他)
(2) 六月十五日
12. 蓮霧
 - (1) 福田、川口、米野
(2) 六月廿八日
13. 苗吹川東谷宿(分五〇回)
 - (1) 林、岡谷、福田、下出、藤村、近藤、粉崎、小田、米野、香田(他)
(2) 六月十五日

14. 北ア合宿(分五一回)
 - (1) 加藤、岩瀬、林、岡谷、福田、川村、川口、高橋、白井、田口、田所、鈴木、藤枝先生、田中哲(他)、車沢(他)
(2) 八月一日〜十二日
15. 甲斐駒ヶ岳
 - (1) 佐藤他一
(2) 八月十一日〜十二日
16. 陣馬山
 - (1) 福田他
(2) 八月十五日
17. 奥秩父主脈
 - (1) 下出、戸田、他一
(2) 八月十都〜十九日
18. 長次有陵
 - (1) 林他
(2) 八月廿三、廿四日
19. 苗場山
 - (1) 川口他
(2) 八月廿日

田中実(他) 田中哲(他)
(2) 七月十五日〜廿日

部員名簿 (一九五三年度新入生を含む)

三正 林 武志	武蔵野市吉祥寺四七八	現シ
〃 関谷 徹	杉並区下高井戸四九六三	現シ
〃 福田宏二郎	杉並区久我山三一九七	現シ
〃 下出重康	杉並区井荻一ノ一二二	
〃 川口和雄	中野区宮園通五ノ三一	
三進 戸田 清	杉並区高円寺七ノ九二九	
飯塚康史	三鷹市幸礼二〇〇五	
佐藤忠彦	武蔵野市吉祥寺七九八	
高橋 信	杉並区高円寺一ノ二	
小田尚英	中野区上野原助五	
米野弘躬	杉並区入宮前六ノ四〇一	
伊藤弘美	杉並区高円寺六ノ七五四	
二進 田所孝哉	杉並区和泉町四七一	
三折 石川宏之	武蔵野市吉祥寺六七七	
山中房子	杉並区久我山一ノ二八二	
岩崎元子	杉並区大宮前二ノ七一	
田口 毅	杉並区上高井戸四ノ一八二八	
二折 鈴木重治	三鷹市下連雀三〇五	
宮上和正	中野区大和町一五七	
坂井定雄	中野区本町通六八五	
田中原之	中野区桃園町一四	
小林一三	中野区野呂三ノ八八五	
稻葉吉正	杉並区阿佐ヶ谷三ノ六四四	

部員移動

一九五三年一月一日付左記部員の退部を認め、正部員会
 斎藤忠正(当三正) 川村 宏(当三進)
 三月十日付北海道へ転校、 金沢成光(当一進)

部 備 品 一 覧 表

天幕 ウィンパー型冬用四人フレーム付	1
〃 ウォール型夏用五人	1
〃 アルペン型夏用三人	1
エアマット	4
サイクル(三ツ峠具ハルランビキ等)30m	1
ゴッフエル	1
ラジウス	1
ピッケル	1
バーナー	3
鉈	3
鋸	2
スコップ	2
大鉈	2
バケツ(キャンパス)	3
ワカン	5
ガリリタンク(1ガロン用)	2
ヤスリ板	1
カンテラ	3
その他小物	多 数

- 20. 川苔山
 (1) 金沢他
 (2) 八月(三日間)
- 21. 川苔山
 (1) 加藤他入
 (2) 八月廿六、廿八日
- 22. 川苔山
 (1) 福田他一
 (2) 八月廿八日
- 23. 三ツ峠
 (1) 関谷他多数
 (2) 八月十六日

部内告知板



本年度(一九五三年度)役員を左の通り決定する。但し正部長は八月末を以つて役員を退き二年部員に正部長進級なき場合は、正部長出現までOB審査会が部を運営する。

正部長出現までOB審査会が部を運営する。

顧問教師 中村 淳 先生 (社会)

篠崎 武 先生 (生物)

平山清太郎先生 (体育)

松本 先生 (女子体育)

NAC会長

安藤英彦 (早大)

同 幹事 中川若一(早大) 田中將利(早大)

現役監督 田中將利(早大)

同審議員 田中実(中大) 中野英司(東大)

平沢 勇(早大) 筈田英次(日大)

現役

チーフリーダー

林 武志

サブリーダー

岡谷 徹

福田宏三郎

(各係は次号で発表する)

編集後記

○昨年の六月に出すはずの部報が九月にのみ発行に十二月の部報まで、いつしか蓄積かほる四月となつてしまひ、まことに申し訳ない次第である。

やつと夏山の報告を刻んでゐる間に、もう我々の仲間が南ア仙大岳に部覆をかかげ、雪やけした顔で帰つて来た。彼等の心もといはたツクの中から反響の痛々しい音が聞え、又雪山とは云え、陽のふりそゞ雪陵に吹く春風のかおりかしたりする。その音やかおりこそ、我々の血の中にある共通の情熱をわかせずにはおかない。さあ今年も斗おう。

○山ばかりでも社会でもそうだが、他人のものと自分のものとの区別はつきりさせる必要がある。如何に尊敬すべき監督者であろうと、規律のよい者は山の仲間たる資格はない。此所で書く筋合ひのものではないが、部の信頼を強く保つ。OB又は他山部会より借用せるものは直ちに返却すること。二年生諸君、今年こそ君達の活動が部の生命である。大いに動きあはれよう。

分 冊 十号

非売品

昭和廿八年四月廿日発行配布

発行所 東京都杉並区大宮前三二八

都立 西高山岳部

責任者 林 武志

編集者 岡谷 徹